

二〇一七年に観た舞台から

二〇一七年の一年間に観た舞台作品は短篇も一本と数えて合計九三本であった。体力的に東京へ行く自信がなくなつたからすべて札幌と道内での舞台であるが、一月は病気の為に丸一か月休養していたこともあって、かなり観劇数が少なくなつたことに感無量の気もする。

その中から印象に残つた幾つかの作品をご紹介しますのだが、すべて『続・観劇片々』五六号・五七号・五八号・五九号所載の観劇記からの抜粋・要約である。

なお字数の関係で、残念ながら同じ劇団から二作品を選んだ次の二つの演目を割愛した。

『北緯43度のワーニャ』 札幌座 二月上旬演
『りんご』 シアター・ラグ・203 三月上旬演

学校でなにやってんの 北海道北見緑陵高校演劇部

一月二日 かでる2.7
演出 後藤留果(二年)

松井哲朗(劇評誌「続・観劇片々」主宰)

前向きに生きる若さの日々

ある高校の放送部は部長が一人だけの部活だが、彼は文化関係の各部長を集めて話を聞きドキュメンタリー番組を創ることを発案する。

放課後にこの五人の部長が放送室に集まってインタビューを行った後に一人残つた放送部長はドキュメンタリーの編集作業に没頭する。

吹奏楽部長が帰宅時間まで、ここで待たせて欲しいと戻ってくる。彼女は今日の話し合いの中で自分たちの部活の良さ、楽しさを再確認したのだ。

その話を聞いた演劇部長は、この放送局長の前向きな姿勢、態度をメインに劇を創つて出演者を募集しようというアイデアを思い付く。

何もない所から何かを考え付き、前向きに毎日を生き、ていく工夫を楽しむ青春を描いた一篇であり、全編コミカルな演技とわざとズレル演出、そしてテンポの良さで若さを感じる後味の良い舞台を創つた。

狼王ロボ

劇団千年王国

二月四日 かでる2. 7

原作Ⅱアーネスト・T・シートン

脚本・演出Ⅱ櫻井幸絵

パワーアップした刮目の舞台

一一年一月にサンピアザ劇場でこの舞台の初演を観ているがその時の感想は「動物も大自然もあるがままの姿が本来の姿であって、人間の都合で、その存在を左右することが許されるのだろうか」という根源的な疑問が提出される。」とある。

今回、強く感じたのはダンスのパワーアップだった。前回ももちろんダンスの切れ味とパワーの魅力は素晴らしかったのだけれども今度は合計一〇人のダンサーの魅せ場がより多く大きく強くあつたような気がする。

ロボの愛するブランドが人間の造つた仕掛けの魅力に負けて死んだ後のロボの脱力やシートンとの友情とも見紛う奇妙な交流はまるで人間同士のようないわゆる人間味を感じる。シートンも、この関係に何かを見つけて、このようなフィクションというか一種の神話を創つたのだと思う。まさにこの物語は神話である。

どんぐりの学校

北海道新篠津高等養護学校演劇部

三月一日

ポルトホール
作・演出Ⅱ山田勇氣

みんな違ってみんな良い

この舞台を観ていて、金子みすずの詩の一節「みんな違ってみんな良い」を思い出した。動きが鈍かったり応答が遅かったりする人を「ドンなやつ」とか「ドンくさい」とか人を差別する時によく使われる言葉だ。「鈍」とか「貪」を連想するのだろうけれども、この舞台では「ドン」から「ドングリ」を連想させて、担任の伊藤先生は知的障害の高校生たちに宮澤賢治の「どんぐりと山猫」を劇にして演じる事を提案する。

この子たちに柔らかに強く教える先生、もちろん、この先生も生徒が演じるのだが、一郎の役を演じる高田三郎は疎外されやすい転校生であり、自分の存在に身動きが取れずますます落ち込み凶暴になつてゆく林クンもやがて得意のギターでBGMを演奏することになつて徐々に協調する。そうして、それぞれ個性が大きく育つて、だんだんと皆が一つの創造に力を合わせてゆく。

その他の生徒たちも、それぞれの個性を「どんぐりと山猫」の裁判の結果を踏まえて自分たちの存在を自覚してゆく。この養護学校と山猫の裁判とを橋渡しした、この物語の着眼点がユニークで素晴らしい。

そしてそれを訥々と誠実に演じる生徒たちは、きつと自分たちのこととして強く感じている事だろう。演劇を道具に使いながら演劇そのものの魅力を強く興味深く表現した佳作であつた。

えほんがたりく大人のための絵本ライブく

万代いづみ

三月二五日

キルテングビー

絵本から劇の魅力を掘り起こした

世の中にはたくさんさんの、それこそ無数とも言えるほどの、いわゆる絵本が出回っている。絵本は基本的には子ども達が見て読む本だと思っている。ところが、その中には大人が見たり読んだりしても、充分どころか大人にこそ読んで欲しい絵本がたくさんあることに気が付いた「キルテングビー」の万代いづみさんが、そういう絵本を、市内の演劇で活躍する現役の若い俳優さんたちを起用して「えほんがたり」というライブ公演を始めたのが去年の三月、そして今回の第二回公演が上演された。

具体的には絵本だから、その絵をスライドで映しながら、とか、大きな紙に描いたものを見せたり、喫茶店の小さな客席だから大型の絵本だとそのまま見せたり、いろいろな方法で演じる。それを二人のミュージシャンがピアノとギターで柔らかく激しく包み込む。

様々な物語を色々な手法で表現した絵を観ながら、文字を読むのではなく、演技者が丁寧な心を込めて読んでくれるのを聞きながら絵を見ていると、自分で文字を読むのとは違ったたつぷりとした贅沢な感じが楽しめる。

大人の観客に絵本を語るといふ目の付け所がユニークで文字を読むのとは全く違う新鮮な経験が得られた。

絵本に内在する劇性を再構築して舞台作品のように表現しようとする試みが感じられ、劇の魅力って凄いなあと改めて感心し大いに今後を期待したい。

象じゃないのに……。

劇団札幌座

五月一四日

シアターZOO

原作Ⅱイ・ミギヨン(韓国「そうじゃないのに」)

翻訳Ⅱ木村典子 脚色・演出Ⅱ斎藤歩

圧縮された人間関係の自己主張と齟齬と

札幌大通りで行われたイベントのパレードに出場した六頭の象が、何かに驚いて突然走りだし、その中の先頭の一頭が野外舞台で選挙演説中の知事候補をなぎ倒し大怪我を負わせた。その飼育担当責任者は過失致傷容疑で逮捕留置されている。

精神鑑定医は、容疑者の供述から悪意のない性倒錯病患者と推定する。そして検察庁本部の刑事は、選挙事情を勘案し様々な状況証拠から、テロ行為の疑いがあると責める。

見舞いに来た飼育係の同僚は日頃の勤務状況を話すのが、それは容疑者にとっては不利な話だ。面会に来た母親は、この子は幼い頃から飼っている小動物は何でも放してしまいう子だったとその資質を語る。

容疑者の幻想に現れた当の象は、飼育員と心が通じ合っているから互いに束縛を逃れたい一心だったと語る。

五人五様の意識の相違はどれもが本当なのか、何かか意図されたものなのか、人間関係と社会の在り様が象徴された一時間少々の中に圧縮されていた。

5月の蝶

クラアク芸術堂

五月二八日

コンカリーニョ

作・演出Ⅱ小佐部明広

5月の蝶と世界の終焉との謎

一六人の登場人物が演じる二時間の大長編。宣伝リーフレットを読んでも客席へ座ってから当日パンフを眺めても殆んど何が何だかすつきりと来ない。

漬物屋さんの営業方針に対する家族間の話し合いだったり、漫画家と担当編集者との見解の相違だったり、幼馴染やその周囲の男女関係のさや当てだったり、しかもそれが幻術や妖術や様々な思い込みだったり人物が入れ替わったり時代が逆行したり、ますます意味不明の世界に迷い込む。

物語を追究する僕としては、何とかして何がどうなったのかを確定したいのだが、訳の分からない展開が延々と続く普通の場合、ほとんど眠くなるのだが、なぜかこの舞台は訳の分からないままに惹きこまれて行く。そして一生懸命に、この物語の顛末を理解しようとする頑張っていたのだった。

途中から、これらの訳の判らない物語は恐らく、このマンガ家の作品が、いつの間にか現実となり、その現実が逆にこのマンガになり、その交錯自体が、このマンガ家にも判らなくなっていくという展開なのだろうか納得した。

でもそれは僕が無理やりに辻褄を合わせたことであって、この舞台の本質を解明したとは自覚出来ない。いち

ばん不安なのは「5月の蝶」というタイトルと、この舞台との関係、黄色い蝶のシンボリズムと時に出る灰色の蝶との関係、そして五月一日で世界の終焉が予告されていることとの関係などタイトルに関わる肝心の表現の謎が見えなかったことだった。

ある文章に「中世の絵巻物にはチョウがほとんど現れない」という歴史学者・網野善彦氏の説が紹介されているのを見た。「人の魂と考えられ、むしろ不吉とされていたからではないか。その美しさに、かえって恐ろしさを感じていたのではないか」と続けられている。また常識的に蝶は、美しい、繊細、華麗な動き、などのプラス・イメージと同時に「儂さ」のイメージも強いようだ。

そのイメージから、人生という人間の存在に対する予告あるいは妄想みたいなことが湧きあがってくる。

乾いた蜃気楼

下鴨車窓

七月一日

シアターZOO

脚本・演出Ⅱ田辺剛

暑さに閉じ込められた人たちの心情

雨量不足の年は水道が不通になり、住民たちは自宅から遠い麓のコンビニに駐車している給水車からポリタンクで飲料水を自宅に運ばなければならないという劣悪条件の高台にあるマンションの一室に住む若い夫婦、船田亮と真澄。

夫・亮は予想外に高額な退職金を夢見て転職を考える。妻・真澄は必ずしも反対はしないけど今の生活を楽しん

でいたい。

酷暑のある夏の日、真澄はDVDを見ながら水着一枚でテノポの速いモダンダンスに汗を流している。亮は大汗かいてポリタンクで二杯もの飲料水を運んでいる。

日常生活の何気ない一端であろうか？そこへ二〇年も昔の高校時代の同級生・鳥飼雄二がNHKの契約促進社員となつて偶然にこの家を訪ずれる。

この三人のリアルだけれども、現実なのか？それぞれの妄想なのか？という何日間が描かれる。

この暑い日々の描写が、この人物たちの閉じ込められた心情の象徴なのだと思つて観ていた。暑さがインパクトでありシンボルなのだから観客もその暑さを身体で感じられる状況にあれば、この三人の閉じ込められた心情に誘い込まれるのが舞台の魅力だと期待した。

だが現実のこの劇場はむしろ寒いくらいだった。特に僕は昨日までのうすら寒さに懲りて長袖のセーターだったが、今日は急に暑くなつたので半袖シャツに着替えて来たので冷房が効き過ぎて寒い、寒い……。舞台は暑さによる心情の追い込まれを描いているのに、客席は涼しいと言うより寒いので逆反応の演出なのかなつて余計な事を考えて集中できなかつたのだつた。

響く感情

Theater・ラグ・203

七月五日

ラグリグラ劇場

作・演出Ⅱ村松幹男

天災と人災、神と人間とアンドロイド

災害地を旅している若い女性・レイは、ある都会の被災地で災害の前には恐らく大繁盛していただろうと思われる豪華なバーを見つけて案内を乞う。出てきたのは、この店の女主人・メグだつた。

人恋しいメグは早速にレイを招き入れるが、やはり高級店の矜持を持つメグとでは中々に打ち解けられない。その心理劇的な経過が描かれる。

前半の二人の感情の対立が後半にきて、神 vs 人間 vs アンドロイドの対立に転化して行く。

神 vs 人間 vs アンドロイドは結局、神もアンドロイドも人間が創つたものだから、その対立自体が人間の内部抗争とも言えるわけで、それが感情の響き合いともいような相克のタイトルになつたのであるうか？

この三者の具体的な関係を表現する部分でのエンターテインメントの要素は大いに魅力的ではある。

昼間談義

公園の柵。ふらふらと、花粉症の鳥 清水企画

七月二九日

シアターZOO

作・演出Ⅱ清水友陽

全ての命ある存在の不思議さと逞しき

柵で囲まれた入口の無い公園に入りたいたのだが……その公園の存在を紹介したいだけなのか分からない女自身。

次の瞬間にはその公園は小動物園になつていて、その

女はその小動物園の中に居る。その動物たち、鳥たちは、その動物園の飼育動物ではない。それぞれが家族や友人関係を持っているから、ある社会の象徴でもあるのか。

この動物園は遠い昔は海であって様々な古代生物の化石が出る。でもこのシーンはなぜか孤立して全体との調和もなく起承転結もない。全員が真っ黒の衣装で舞台上を飛び跳ね回り、時間も無視して、そういう挿話が次々と現れる。

上手上部の窓枠はある現代家庭のシーンだったりTVの場面だったり、その家庭の男が突然に現実の男として舞台上に飛び出して来たり、ほとんど意味不明だ。

化石の時代が主要な話題になっていることは、もしかして人類出現以前の、つまりなぜ人類が現在を生きているのかを問う作業なのか？それがなぜ入口の無い公園であり小動物園なのか？

でも物語至上主義の僕が、この舞台の観劇中少しも眠くならなかった展開の不思議さ、何だろう？と追及する面白さ！この脈絡の判らない話をリアリティをもつて演じた役者たちの存在感！

ラストは、この公園には入口がないと訴えていた女性が、その公園の中から柵を持ち上げて外へ出ようとしたところでカットアウトになった。

人類の誕生の不思議さ、人間たちの社会の営みの複雑さ、それを知ってか知らずにか生命を営み続ける、人間を始め全ての命ある存在の不思議さと逞しさを、自由自在に気ままに表現したのが、この舞台なのであるうか……

タウが見た半透明の風景

浦とうふ店

八月二六日

BLOCH

脚本 町田誠也

演出 浦竜也

国同士と民族同士の交友関係

東南アジアに位置する架空の「北リアド共和国」からその国の国費で憧れの日本に先進国の政治・経済・文化などの勉強のために留学に来たタウは、経費節減の為に古びたシェアハウスに住み込む。

祖国の北リアド共和国は領海権を巡って近隣国と交戦中だ。そういう環境の中で恵まれて留学できることにタウは覚悟し、祖国の為に力一杯の勉強をしようと地味に懸命に励む。

タウはこのシェアハウスの住人達が、模範的に一生懸命に勉強し仕事をし、友好関係を作って国の為に努力していると感じていたのだが、このシェアハウスの同居人たちは、それぞれ悪い人は居ないようなのだが、何よりも自分自身のための生き方が自由だと思われることが意外だった。

だがタウは、そんな自由人である同居人たちの私生活にも徐々に馴染んでいく。だがタウは最後のよりどころとしての祖国への忠誠心が何よりも強く、彼らの生き方や考え方が半透明の幕の向こう側にあるような感じだった。逆に同居の日本人たちから見ると、タウは国家に縛られている不自由な人民としか見えない。

このハウスに住む若い看護師志願のモモに惹かれたタウは、結婚を前提に交際と北リアドへの移住を申しこむ。

日頃のタウが故国の家族との親密な繋がりを大事にしていることを見聞しているモモではあるが、これだけは簡単に国柄の違う異国に行く決心には繋がらない。

金に困っている学生・元氣は、あの手この手でタウに借金を申し込むが国費留学のタウにはそれには応じられない。誰も居ない日に元氣はタウを殴り倒し、タウの靴の中の財布から有り金を奪って消える。

その時にタウの留学期限は終わり、切迫した北リアドからはタウに召集命令が来てタウは全ての思いを残してすぐに帰国する。この状況は現実の日本でも起こりかねないリアリティが濃厚でいささか考え込んだ。

それから何年……タウはこのシェアハウスに全く連絡は無かったのだった。

大山デブ子の犯罪

赤色カーニバル

九月九日

アトリエ 阿呆船

作 寺山修司

演出 二こしばきこう

妄想・欲望が産んだ象徴は非實在の人物だった

初演（〇四年六月）の観劇では、マイノリティ（少数派）を差別することによって、己のアイデンティティ（自分の個性）を確認するだけであつたのだろうか？ マイノリティを容認することによって、己の精神の広さを自ら確認する満足度に酔うのか？”と結論している。

再演（一一年九月）の観劇では、食欲の止まらない欲望に応じて食べまくつたために命を失つたのに、いまだ

に止まらない食の要求の為に食い尽くす人たちが存在して、その究極の犯罪が原発の暴発だ。この舞台は人間の絶えない欲望と文明の行き着く先の怖しさを描いている”と結論している。

そして今回の三演目だ。二〇年も前に亡くなったとされる欲望の象徴である大山デブ子は、人々の妄想・欲望が産んだ非實在の人物であつた、というラストが最も強く印象に残つたことだつた。つまりデブ子は人間の限りない欲望の象徴なのだ。そして欲望は最終的には破滅するのだと強く感じられた。

もしかして、これは三回とも戯曲台本に手入れをしたのではないのか？と思われるほどであつた。すべて同じ本だつたら演出の押さえどころなのか、観る方の感性の問題なのか、是非、戯曲自体を読んでみる必要を強く感じる。どうしても原作の戯曲が読みたくなくて、やつと道立図書館から借りる事が出来た。

そんなに長くはないから一気に読める。まず思つたのは、全体の雰囲気「この世はお祭りの世界」という感じで、「欲望が全てを支配するが、それは政治の陰謀だろうか？」という感想だつた。理屈っぽい言葉の繰り返しが多いのもそのイメージを強める。

それを読んでいるうちに突然、美空ひばりの『お祭りマンボ』という歌謡曲が口をついて出てきたのだ。

調べると原六朗・作詞作曲のこの曲が出来たのが一九五二年だから、僕が一七歳の時に爆発的に大流行したわけだ。今でも殆んど全曲をそらで歌える。

『お祭りマンボ』も全曲、「私の隣りのオジさんその

また隣のオバさんも、お祭り騒ぎが大好きで、お祭りに狂っているうちにオジさんは自宅を火事で焼かれ、オバさんは空き巣に入れられ全財産を失う。

歌詞は「いくら泣いても後の祭りよ」で終わるわけだが、その後がまた賑やかなマンボのリズムで元の世界に戻ったようになる。

これって『大山デブコの犯罪』にとてもよく似ているのじゃないだろうか。六五年前の『お祭りマンボ』とちようど五〇年前に初演された『大山デブコの犯罪』が突然と一緒に笑って踊らされている現代の世に蘇って来たのだった。

アンネの日記

座・れら

一月四日

やまびこ座

脚本Ⅱハケット夫妻(菅原卓・訳)

潤色・演出Ⅱ鈴木喜三夫

新しいアンネ像

第二次世界大戦の中、ナチスのユダヤ民族迫害の犠牲になつた人たちの中で、一三歳の少女・アンネとその家族や、父の友人の家族たち合計八人がボランティア二人の隠れた援助・協力によつて二年半も密室に弾圧を逃れて密かに暮らし、終戦間近ついに密告によつて逮捕され収容所へ強制収束され病没で全滅したが、その隠れ家で書いていたアンネの日記が、その後ただ一人生き残つたアンネの父・オットーの手に渡り出版されて全世界の

人々の感涙をふりしぼつた実話の経緯は広く知られているしこの日記は舞台化され幾つかの舞台を観劇している。

思えば「アンネの日記」は随分と多くの舞台を観ているような気がしていたが、調べてみると、過去三回だけなのだ。それくらい僕にとつても強い影響のあつた作品なのだろう。というか、この作品自体の訴求力が強いので実際には観た以上にその印象が強く残っているのだろうと思われる。それらの舞台は、明日の生死も分からない劣悪な生活条件の中でも、それでも諦めずに明日を信じて明るく健気に生きる素直で率直な少女としてのアンネを観て感じていたような気がする。

だが今日のアンネ像はかなり違つていた。明日を信じて逞しく今日を生きるという少女像は、その通りなのだが、もつとずつとその場その時の生の感情をぶつける裏表のない逞しい少女の印象なのだ。父母や姉、そして同居するペーター少年はもちろん、その両親や後から避難してきたデュッセルさんたちに対しても、どんどんと明けつ広げに、その時その時の素直な感情をぶつける。特に母とは常に衝突する。父だけが自分を理解してくれると単純に思い込んでいる。

今日観たアンネは、そういう少女の印象が強く、アンネの見方が今までと違つて視えた。今日のアンネの方が生き生きとして実在感が強い。いま思うと過去に観たアンネは聖域化されていて一般的な少女よりは奉り易かつたような気がする。

さて、舞台はナチスのガサ入れで全員が逮捕される寸

前で一端ストップし暗転すると、生き残った父・オットーが助けてくれたクラーレルとミープからアンネが残した日記を受け取り、その後日談を延々と語る。

だがおそらく観客はそれは百も承知なのだ。八人が絶望した時点で舞台は終わった方が劇的衝撃としては強いんじゃないだろうか？この部分は蛇足のような気がするが、物語の流れとしては、この後の強制収容所での経緯がなければ尻切れトンボになるのだろうか？

アドルフの主治医

Words of hearts

一月一日

PATOS

作・演出Ⅱ町田誠也

現代に通じる、強権政治に馴染んで行く弱い人間たち

ナチズム全盛時代のドイツの若い医者であるヨーゼフ・メンゲルは軍医の時代に戦線で大怪我をして職を失い苦勞していたが最愛の妻・イレネに助けられ、何とか再起を模索していた。

そのころ世話になった恩師のオトマール・フオン・フェルシュアーから、ヒトラーの次代を創る研究所への就職を勧められていた。悩んだ末、ナチズムへの感化もあり、その研究が収入的にも格段の違いの魅力もあり、妻への報いの気持ちもあり、研究所入りを決意する。仕事の成果によつては教授の地位も期待される。

同時に妻の妹であるサブリナ・シェーンヴァインの恋人であるハンス・ラフレンツが無職なのでヨーゼフの研究

の助手を務め姉妹の夫二人で研究生活に没頭する。

同時進行で、何年か後の南米のある田舎街の安下宿での、小説家志望のヤコフ・フランクリンと魚釣りで日々を送るホフマン・クリード、そして下宿のおばさん・マルシアたちの穏やかで平和な日常が描かれる。

ヨーゼフの妻イレネが夫に「平和になったらどこへ行こうか？」と聞かれて、その南米の街の名を答えたことで、この南米のシーンは彼らの何十年後の姿だと思われた。

ヨーゼフは次第にナチズムに深入りし、パーキンソン病に侵されたヒトラーの次代目を作り出すための遺伝子研究をするために、ユダヤ人の捕虜では絶対に純粋なドイツ人の血統が得られないと考え、妻・イレネに純粋なドイツ人との人工授精を強要する。

さすがに信じた最愛の夫のこの申し出も、こればかりは応じられない。当然のことでイレネは今、貰ったばかりの結婚指輪を置いて静かに出て行く。

同じ頃、妹夫婦も幾度かの葛藤の末、反ナチス団体への加入を目指して密かに義兄との交友を絶つ。

やがて敗戦、狂った研究員・ヨーゼフは、ユダヤたちの追跡を逃れて妻の憧れていた南米のあの街へと移住したらしい。小説家が釣り三昧の男に銃を向けるのがラストシーン。

この話は事実を基礎にフィクションを積み上げたのかも知れない。しかし人間の弱さをナチズムの脅威に結び付けて舞台に描いたのは、現代にも通じる強権政治に屈する経過を改めて大きくシヨッキングな形で受け止めさせ

せた目線に強く同感する。

父と暮らせば

MAM

一月一二日

シアターZOO

作||井上ひさし

演出||増澤ノゾム

良い戯曲をキチンと上演した感動的な舞台

期待通りというか、期待以上の舞台だった。それは戯曲自体が感動的なのだ。戦争がもたらす非人間的な悲劇を静かに糾弾する、この戯曲の真髓を的確に表現すれば、当然、この戯曲が持つ本質が観客の心を打つのだ。今日の舞台はそれが出来たと言うことであろう。

良い戯曲をキチンと表現したら、こういう感動的で心に残る熱い舞台が出来るのは当然である。

マクベス

劇団竹竹(韓国)

一月二三日

PATOS

原作||ウィリアム・シェイクスピア

脚色・演出||キム・ナギョン

机と椅子で表した激しい権力闘争

韓国の舞台作品は、とにかくエネルギーが豊富だという先入観がある。今までに観てきた結果がそういう既成概念となつてしまっているみたいなのだ。この作品もそういう期待に背かなかつた。とにかく凄い迫力の一言に尽きる。

物語よりも、まず小学校の教室にあるような木製の机と椅子をそれぞれ一〇台づつ使つて縦横無尽に組み立てたり配置したり激しく使いこなす。それを観て「椅子」はその人の社会的な「立ち位置」であり、「机」はその人たちを囲む社会構造ではないかと思つた。

『マクベス』は一言でいうと、権力争いの展開だから、机と椅子を奪い合つたり構築し直したりするのが象徴的な表現だと思ふのだ。

その机も椅子も薄黒く焼いたような造りであり、登場人物の八人はすべて濃い灰色の上着とズボンで統一されている。時にガウンを羽織るくらいで皇帝も奴隷も同じ衣装なのは、人間は基本的には平等だという象徴だろうとも思われる。

気になつたのは翻訳文字盤だ。文章が日本語離れしていかにも翻訳調でピント来にくい。長い文章を読み切らない中に消えてしまう。行の中間部分が滲んで読めなくなる。舞台上部の位置取りが悪い。などなどの欠点があるが、そもそもは象徴的な語句だけで十分だと思ふ。言葉の詳細な内容は不要だと思われるからだ。

リチャード3世

弦巻楽団演劇研究講座・成果発表公演

一月二五日

サンピアザ劇場

作||ウィリアム・シェイクスピア

訳||松岡和子

演出||弦巻啓太

古典的名作の抽象的表現

古典的名作戯曲ともなると、それをどういう形式で表現しようとか、様々な試みが考慮されると思われる。

この『リチャード3世』は二人の男女がほとんど黒系統の現代的でカジュアルな衣服に王冠やアクセサリーなど玩具のようないでたちで、やはり玩具のような小道具の剣を使って、ほとんど集団で争いのシーンを演じる。

物凄い早口の台詞は、長セリフを丸暗記して喋っているように聞こえてほとんど内容は分からない。初めからそれを承知で演じているとも思われる。これは先日「竹竹」の『マクベス』の翻訳ととても良く似ている。

配役も男女の区別はなくリチャードもリッチモンドも女性だ。そのことにおそらく意味は無い。男とか女とかは関係ないだろう。人間の根本の在り様を象徴的に表現した舞台であり、台詞の説得力を無視したのも偶然だろうが「竹竹」の『マクベス』に似ている。

鯨がどくん

NPO法人コンカリーニョ

二月二四日

コンカリーニョ

作／畑澤聖悟

演出／納谷真大

宇宙史・地球史・人類史の中の人間の生き方を考える

スコットランドに一〇〇年に一度現れる不思議な村の伝説があると言う。それが「ブリガドーン」である。つまり人間は常に過去の在り方と未来の存在とをイメージしながら生きているのだろう。

この舞台はその「ブリガドーン村」の伝説を基本として二〇一一年に起きた東北大地震で消えた東北地方の人たちの心境を思い起こすことによつて、今を生きている私たちの生き方をもう一度考え直そうじゃないかという提案とも受け取れる。

つまり人間はこの宇宙へ、地球へ、そして日本という制約された時代と地域の中で日々を送っているのだが、人類史・地球史の中で見直すと、その個人史は実にささやかな事かも知れない。もつと大きな幅広い眼で人間の生き方を考え直そうという提案とも受け取れる。

高校演劇で創られた沢山の舞台作品が、次々と細切れで出てくるのだが、つまりそれはほとんどそういう宇宙史・地球史・人類史の中の人間の生き方を鋭く的確にしかもマンガチックに切り取つて繋いだ大長編なのだ。

だから全体の想いはとても強烈にわが心情を撃つのだが余りにも転移・変化が激しいので細部には付いて行けない焦慮が起こる。それは切り捨てても良いのかも知れないのだが僕には出来ない。台本を読み、その台本とらめつこをしながら、この舞台の深層を手繰つて行きたいと思う。大変だけれども楽しく期待して、その興味深い作業を進めたいのだ。